

## 魔女研究史

96K004 千種研二

### はじめに

ヨーロッパ社会において、魔女は古代から存在していた。しかしそれは後の魔女狩りの時代における「魔女」というよりむしろ、「魔術（近代では呪術という言葉で考えられている）を使う女性」と呼ぶべきである。超自然的存在に対し畏敬の念を持ちながら、それを支配することによって自己の欲求を叶える事を目的とした魔術を使い、彼女達はしばしば病気や怪我を治したり女性の出産を助ける助産婦の役割を果たした。こうした魔女たちは、先史時代から信仰の対象とされていた<sup>(1)</sup>。

しかし、超自然的存在を支配するのではなく、それに依存していくことを目指す宗教との対立を免れることはできず、魔女は中世キリスト教社会発展の過程で次第に迫害の対象になっていった。それが、15世紀<sup>(2)</sup>から17世紀にかけてキリスト教ヨーロッパ社会を舞台に巻き起こった魔女狩りであり、この嵐の中で莫大な数の人々が「魔女」であるとして処刑され、命を落とした。魔女とされた人々は女性だけでなく男性も含まれ、彼女ら（彼ら）は箒の柄にまたがって夜空を飛び<sup>(3)</sup>、魔術を使って人々に危害を加え（マレフィキウム）<sup>(4)</sup>、サバト（魔女集会）<sup>(5)</sup>を開いて悪魔を崇拜し、悪魔と契約して食人儀式を行い、黒ミサ<sup>(6)</sup>によってキリスト教を冒瀆していると考えられた。周囲の人間は彼らを密告によって告発し、逮捕された者は幾段階もの裁判（審問と拷問）の後に「魔女」であると認定され、そして処刑された。魔女狩りの猛威は1600年代に頂点に達し、その犠牲者は数十万人とも数百万人ともいわれている（記録文書の三分の二が失われている為、現在その正確な数値を確定することは非常に困難である）<sup>(7)</sup>。

18世紀になると、啓蒙思想の台頭によって魔女信仰は衰退の道を歩み、同時に裁判による魔女狩りは終息する。制度化された自然科学の発達に裏付けられた脱魔術化により魔女信仰は表面には現れなくなった。しかしその思想は完全に失われた訳ではなく、メルヘンや民謡の中に折り込まれる形で人々の意識の内に入り込んでいくことになる<sup>(8)</sup>。

以上が魔女の歴史の概略である。では魔女狩りという、大量虐殺とも呼べるこの現象はどうして起こったのか、この驚くべき残虐な結果を生み出した原因は一体何だったのか、処刑の犠牲となった「魔女」とは何だったのか、そして、そもそも魔女は実在していたのだろうか。これらの問い合わせについて、これまでに無数の著書・論文・研究書が出され、数多くの研究者がそれぞれの見解を述べてきており、特に近年では「魔女論」は一つのブームにもなっている。しかしながら、この百数十年の間に交わされてきた議論は、何一つとして一致した意見・正確な見解をもたらしてはいない。

本稿では、中世から近世にかけてのヨーロッパにおける魔女狩りへの様々な問い合わせに対する答えを探る準備段階として、過去に魔女研究を行ってきた主要な研究者を数人取り上げ、19世紀から近年にかけての魔女研究の過程を見ていくことにする。

## 第一章 19世紀における古典的な魔女研究

### 1. 魔女研究の始まりと二つの流れ

ヨーロッパにおいて魔女研究が開始されたのは19世紀であり、その当初は「魔女などというものは実在せず、権力者の捏造と妄想の産物である」という歴史学的見解が当時の進歩史観と結び付いて受け入れられていた<sup>(9)</sup>。

しかしその後、キリスト教以前の異教の思想が中世ヨーロッパ社会の根底に生き続け、それが中世の魔女観念に影響を与えたという見解がだされた。魔女は妄想であるとする立場と、この新しく現れた、魔女（と考えられた人々）の実在性を信じる立場の二つが後の魔女研究の中で大きな二つの流れとして続いていることになる。

この新たな立場を生み出すきっかけを作ったのが、偉大なドイツの民俗学者ヤーコプ・グリムである。グリムは『ドイツ神話学』（1835年）の中で、古代ゲルマンの信仰が中世の魔女観念の中にも見出されることを示し、ヨーロッパのキリスト教化以降も残存し続けたそれら信仰が中世に形造られる魔女のステレオタイプの一端を担ったという見解を出した<sup>(10)</sup>。そして、その考えが魔女裁判研究に取り入れられ、その結果、魔女狩りは反キリスト教的セクトに対して行われた迫害であるという見解が生まれる<sup>(11)</sup>。

それを推し進めたのが、ドイツの熱心なローマ・カトリック信者である2人の学者K・エルソスト・ヤールケとF・J・モーネである。ベルリン大学の刑法の教授であったヤールケは、魔女集団とはかつてのゲルマン人の自然宗教を受け継ぎ実践し続けた人々であると論じ、その宗教の中核を成していたのは、悪魔の力によって効力を發揮する、自然のいとなみに影響を与える秘法であるとした<sup>(12)</sup>。一方歴史家モーネは、1839年にそのテーマについての異説を唱えた。彼によると、魔女集団は、黒海北岸にいたゲルマン人達が異教神信仰を受け継ぎ地下で秘密に組織された結社であり、夜の大宴会や山羊に似た神に対する崇拝、魔法と毒薬の使用に特徴付けられる彼らの宗教は、常にキリスト教と対立し続けたのである<sup>(13)</sup>。

グリムはキリスト教以前の、豊饒信仰を含む民間信仰が魔女のステレオタイプやサバトのイメージに影響したということを示したにすぎなかったが、そこから反キリスト教的セクトへの迫害が魔女狩りであったと見解を飛躍させたのが、この2人の学者であった。熱心なカトリック信者であった2人には、当時の保守的な人々の間で広がっていた反キリスト教集団に対する恐るべき強迫観念がつきまとっていたのである<sup>(14)</sup>。

### 2. ロマン主義的研究～ミシュレの魔女観

ヤールケとモーネとは対象的に、教会側からではなく、迫害された魔女側の見地から魔女を論じたのが、フランスの歴史家ジュール・ミシュレである。彼は1862年に『魔女』を公刊し、その上巻においてある一人の魔女の誕生とその行為を圧倒的な創造力で描き出す。彼は中世ヨーロッパの農奴制に苦しむ女性の苦痛を表して、「歴史」というものを女性の側から描いたのである。この視点は特筆すべきものであろう<sup>(15)</sup>。事実、それまで歴史は男性が創り出すものだとされてきたし、中世社会において女性は様々な形で男性中心の社会から疎外されてきた<sup>(16)</sup>。それ故、ミシュレは魔女を中世における過酷な状況に置かれた女性の反抗の象徴と考えた。

さらにミシュレは、豊饒神信仰と魔女を結び付けて理論を展開する。キリスト教によって定められた社会秩序に対する反抗として魔女が行った古来の異教的な集会がサバトであり、それを指揮していたのが1人の女司祭であった<sup>(17)</sup>。それらサバトや女司祭の崇拝は古来の豊饒神信

仰に由来するとして魔女の実在を信じたミシュレは、魔女への同情の念を強く押し出している。これは後のフェミニズム思想につながる理念でもあるが、それと同時に、ミシュレは、魔女研究においてロマン主義の創始者として位置付かれている。

## 第二章 本格的な魔女研究～20世紀～

### 1. 民族学的研究 ～マレーの魔女観

ドイツの民俗学者グリム、フランスの歴史家ミシュレの思想を受け継ぐ形で、20世紀に入り登場したのがエジプトの考古学者で、民族学者でもあったマーガレット・A・マレーである。彼女は1921年に『西ヨーロッパの魔女崇拜』を発表し、魔女信仰を持つ原始宗教は元来牧畜農耕の豊穣祈願を目的としており、魔女がサバトで行う儀式はすなわち豊饒儀礼<sup>(18)</sup>と結び付いたものであるという見解を打ち出した。

この解釈は「魔女教土着信仰説」といわれ、マレーはこの説を初めて組織的に体系化し、学会を搖るがす程に発展させた<sup>(19)</sup>。キリスト教以前から存続していた豊饒信仰が魔女の実体であるとするこの見解は、その後の魔女研究において大きな影響力を持つことになる。

『西ヨーロッパの魔女崇拜』と続く『魔女の神』（1933年）において、マレーは中世まで残存した豊饒神信仰の存在と魔女の実在を論じていく。彼女の見解によると、17世紀にいたるまで西ヨーロッパにはディアヌス神と呼ばれる2つの角を持つ神への崇拜をその中核とする古代宗教が残存していた。その神は収穫と四季のサイクルを表わし、周期的に死と復活をくり返すとされ、その復活と豊作を確保するために儀礼的ないけにえが遂行されていた。彼らの組織は13人の成員から成り、西ヨーロッパ全土に広がるその組織は、地域的なサバトによって基礎付けられ、厳格な規律から出来上がった組織構造は非常に強固なものであった。集会を開いてディアヌス神への崇拜を行う彼らの姿は、異端審問官などの教会当局には悪魔崇拜の一形態として見え、教会側は自分達の敵対者に対して攻撃を始める。それが魔女狩りであった<sup>(20)</sup>。

イギリスで起こったマレーの説は当時の学会に大きな衝撃を与えたが、同時に激しい批判の対象にもなった。彼女の著書にはあまりにも荒唐無稽な史料が多く、そこから導き出される彼女の解釈はあまりにも飛躍の大きすぎるものばかりであったからである。当時、魔女研究では歴史学的アプローチに対して、民族学・人類学的アプローチが大きな勢力を持ち始めていたが<sup>(21)</sup>、それだけにマレーの著書は厳密な史料調査に基づく歴史主義的研究者たちの徹底した批判をあびせられた。後の章で言及する文献学に通じたノーマン・コーンの批判はその中でも特に厳しいもので、マレーの恣意的な史料操作に対して厳しく反論している<sup>(22)</sup>。マレーの論理とそれに対する批判は、歴史学的研究と人類学的研究の間の亀裂をより明確なものにした。

確かにマレーの研究形式は、所謂実証的な研究とは相反するものであろう。しかしながら、彼女の研究には評価すべき部分もある。魔女研究の土台がまだしっかりと形成されていなかつた時代に、女性でありながら人類学の見地から大胆なアプローチを試みたその先駆者的役割は後の研究に大きな影響を与えるに至った。今日の魔女論ブームを生み出すきっかけをつくったと言っても、決して過言ではないだろう。

### 2. 新たな歴史学的アプローチ～ギンズブルグの魔女観

1970年代に入り、イギリス・フランス・ドイツにおいて魔女裁判研究が新たな局面を迎えたが、イタリアの歴史学者カルロ・ギンズブルグが発表した『ベナンダンティ』（1972年）は学

会に大きな波紋を投げかけた。なぜなら、歴史家であるギンズブルグが魔女のサバトと古代の豊饒儀礼を結び付けたからである。即ち、彼は歴史家でありながら、マレーらがとった様な民族学的見地に立つ立場をとったことになる。

『ベナンダンティ』の中で、16・17世紀の北イタリアに存在した農民集団「ベナンダンティ」が行っていた豊饒儀礼が、異端審問官によってサバトとされ、その圧力によって彼らが反キリスト教的な、悪魔を崇拜する魔女集団とされていく過程が、綿密な尋問調書の検証から実証的に描き出された。特に彼の研究が大きな意味を持っていたのは、サバトの観念の中にユーラシア大陸に広く分布する死者儀礼、シャーマニズムの要素を見出したということである<sup>(23)</sup>。その事実に気付いたギンズブルグは、続く著書『闇の歴史』（1989年）でそれを解明していく。

ベナンダンティの儀礼では、農民達は緊張型恍惚状態（カタレプシー）に陥り、彼らの告白には動物への変身といったシャーマニズム的要素があった。ギンズブルグは古代の女神に対する信仰儀礼をイタリア・フランス・ドイツにおける事例から検討し、それら儀礼には必ず民衆のカタレプシーが存在していたこと、そして動物への仮装の風習の考察から、動物が死者の世界に通じる存在であることを知る<sup>(24)</sup>。

さらに、彼が調査の対象とした神話・寓話・儀礼の全てが生者と死者の関係・交流に関連しており、それらが長期間にわたって残存した結果、教会によってサバトのイメージに組み込まれたということ<sup>(25)</sup>を、歴史的データの慎重な考察、実際の事例の地道な調査と綿密な検証によって説得力を込めて示している。

ギンズブルグは從来の、魔女の迫害にのみ光が当てられ、魔女の告白内容には目が向けられてこなかった悪魔崇拜研究を批難している。民衆信仰とキリスト教エリートの知識体系を区別し、魔女の告白という側からの研究を、あくまで歴史学の基本に忠実に進めた<sup>(26)</sup>。

歴史家は、裁判官が容疑者を拷問によって魔女に仕立て上げ、魔女とその信仰は単なる妄想の産物であると考え、一方民族学者や人類学者は魔女信仰の実存性を信じ、キリスト教下においてもそれは生き続けていたと主張する従来の魔女研究の形式から、ギンズブルグは一步踏み出すことに成功した。これは魔女研究にとって貴重な、しかし非常に重要な前進であるといえるだろう。

### 第三章 本格的実証研究とフェミニズムの台頭

#### 1. 革新的な史料批判～コーンの魔女観

様々な諸分野での研究と同様に、魔女研究においても、多くの著作と研究に対して、当然の如く批判が向けてきた。ノーマン・コーンは著者『魔女狩りの社会史』（1975年）の中でマーガレット・マレーをはじめ多くの研究者を批判し、さらに魔女裁判についての史料批判も行っている。それは非常にアカデミックでかつ説得力を兼ね備えていた。

同書は魔女の大迫害の歴史そのものではなく、魔女狩りの精神的起源に関するものであるが、中でも注目すべきは第6章、7章で展開される通説批判である。コーンはその中で、それまで（あるいは今日でも）広く受け入れられている三つの論理を批判し、反論を唱えている<sup>(27)</sup>。

①19世紀初頭から現代に至るまで、ミシュレやマレーを含む多くの研究者たちが、魔女の社会、ないしはセクト、ローマ教会によってそう解釈された異教的な崇拜が実在した、という説を唱え続けてきた。

②サバトは男性の女性嫌悪と女性恐怖から生まれた妄想であり、魔女狩りは男女間における性

の争いの具現である。

③魔女裁判におけるマニュアルとされていた魔女のステレオタイプは、カタリ派に対する異端審問の副産物として13・14世紀に生み出され、その時期にはすでに、告発・拷問・サバトへの出席の自白という形態の裁判が行われていた。

①の理論については第6章で詳しく批判が展開される。サバトや他の儀式についての告白は、一種の幻覚状態における体験についてのものであり、単に彼らが昔ながらの方法で行っていた集会（あるいは宴会）を幻覚というフィルターを通して見ただけのことである。さらに、魔女狩りが実際の社会集団あるいは宗教的崇拝に対して行われたと考えられる根拠は全く存在しないと言明している<sup>(28)</sup>。

②の理論については、それは事実認識の混乱から生まれたものであるとしている。超自然的な手段で人々を害する人間が魔女とされ、ある種の女性がその様な人間であるという信仰は古来から存在したが、サバトを中心とした魔女観念が作られ、魔女狩りが始まった時には、魔女は女性であると想定されることではなくなり、性別・貧富の差・年齢を問わず、老若男女全てが魔女であると考えられたのであるとしている<sup>(29)</sup>。

③については、第7章で展開される。コーンは三つの偽造文書を発見し、14世紀にすでに行われていたとされている魔女裁判に関する記録書は全てでっち上げのニセモノであるとしている。それらの偽造文書は15・16・19世紀にそれぞれ書かれたものであり、今まで信じられてきた、14世紀のフランスにおける異端審問官による魔女狩りは何一つ行われていなかったことを明らかにしている<sup>(30)</sup>。

以上のように通説を批判した上で、魔女のステレオタイプの形成と魔女狩りの開始について、コーンは次のように論じている。

中世後期において、儀礼的魔術は一種の流行となっており<sup>(31)</sup>、教皇はそれらを異端の一形態として批難した<sup>(32)</sup>。14世紀になると、悪霊の呼び出しを罪とした異端審問裁判<sup>(33)</sup>が行われるようになり、それが次第に個人だけでなく集団に対して行われるようになる。これが魔女狩りへの第一歩を踏み出させることになった。

15世紀には、事態は魔女狩りに向けて走り始めることになる。サバトが魔女観念の中心に置かれ、それが農民達の幻覚体験と結び付けられる。そして儀礼的魔術について全ての事柄が、反人間的な悪魔崇拝という伝統的な異端宗派のステレオタイプ<sup>(34)</sup>と重ねて教会当局によって解釈され、新たな「魔女」のステレオタイプ<sup>(35)</sup>が誕生する。伝統的な告発手続きが異端審問的手続きに変更していったことが拍車をかけ、容疑者達は拷問の末に審問官の望み通りの告白をし、他の人物の名前も口にした。全てが雪ダルマ式に増殖し、魔女狩りは動きだした<sup>(36)</sup>。

コーンの批判は今までの魔女研究における中心的理論のいくつかを根底から覆す結果となった。彼のラディカルな姿勢と見解は、魔女研究の流れに一石を投じる存在である。

## 2. 強固なフェミニズムの見地から～シュメルツァーの魔女観

最後に、魔女研究における諸観点のうち、伝統的、かつ近年急激に活発化しているフェミニズムの視点からとらえたものについて考えてみることにする。

古くはミシェレが魔女を、中世の教会と社会が押しつぶそうとした女性の反抗の象徴として描いた。そして自身が熱心なフェミニストであり、現代の実践的な魔女運動にも参加したマレーは、後のフェミニズム的見地からの研究に多くの影響を与えた。魔女裁判の犠牲者の多数を女

性が占めていたという事実から、フェミニズムとしての魔女狩り理解は常に存在し続けてきたのである。

1986年にウィーンの作家ヒルデ・シュメルツァーが著した『魔女現象』は、魔女狩りをフェミニズムの視点から考える上で非常に興味深い。シュメルツァーは同書の中で、「魔女狩りは女性に加えられた迫害であり、魔女の歴史こそ、まさに女性の歴史である」と徹底したフェミニズムを唱えている。

かつてヨーロッパ社会は母権制の文化によって成り立ち、女性は崇高な存在であった。しかし父権制的な北方のゲルマン民族の侵入によって母権制社会は破壊され、その後成立する父権制的キリスト教会の中で女性は悪しき存在となり、次第に魔女にされていった。その過程こそがまさにヨーロッパの歴史であり、父権的キリスト教ヨーロッパ社会の醜惡な部分の積み重なりが、17世紀に頂点を迎えた魔女狩りとして具現化された、とシュメルツァーは論じている。そして同時に、排除された女性の歴史は、同時に男性の、キリスト教的父権制によって歪められた精神の限界を表しているとも指摘している<sup>(37)</sup>。

フェミニズム的魔女研究は、歴史学的研究と対立する形になってしまっている。歴史は迫害された女性ではなく、迫害を行った男性側の視点から書き残されている。この様な史料に忠実に過去を再構成しようとする歴史学的見地からの、男性の視点を中心とした研究には限界があるとの指摘がフェミニズム側から出されたが、その批判は同時に、フェミニズム的研究それ自身をマンネリ化させることになる<sup>(38)</sup>。裁判の犠牲者に女性が多かったという事実に対しても、古いフェミニズムの見地からではなく、より実証的な研究が近年では特に女性歴史学者によって行われるようになってきている<sup>(39)</sup>。

### おわりに

19世紀初頭に魔女研究は開始されたが、当初受け入れられていた、魔女は妄想であるとする歴史学的見解から、ロマン主義的見解、異教の思想と魔女を結び付けた民族学的見解、第二次大戦後の実証的地域研究、そして近年の人類学を多く取り入れた見解など多くの理論が出されてきた。その過程で、魔女は妄想か実在したか、という二つの大きな見地が現れ、さらにその魔女を生み出したのは民衆文化かキリスト教エリートの頭の中か、という二つの相対立する見解が現れ、それらが様々に組み合わさって研究は進められてきたのである<sup>(40)</sup>。

中世末期における「魔女」観念の起源については、キリスト教以前にヨーロッパに存在していた古代宗教の儀礼行為が、異端審問などで用いられた原始宗教あるいは異教のステレオタイプを重ねて見られたことによって生み出されたサバトのイメージから成立した。あるいは、古代ヨーロッパから伝承され続けてきた魔術を使う女性たちや妖精信仰などが、中世における宗教的・社会的不安<sup>(41)</sup>によって悪魔崇拜的な要素と結び付けて考えられた結果、魔女のイメージが作り出されたなど、いずれにしても、キリスト教以前の諸伝承が何らかの形で関係していたと考えられている。それらは、ゲルマン的、古代ギリシャ的、あるいは西アジア的な信仰であったかもしれない。

15～17世紀の魔女狩りという現象については、現在でも明確な原因は見つけられていない。無数の理論が交わされてはいるが、一つの定まった解答を導き出すことは現時点では不可能であろう。歴史学的見地と民族学・人類学的見地の間の方法論の相違も、研究の展開を一層複雑にしている。魔女そのものの実在性にまで議論が及ぶ程、魔女研究は一筋縄ではいかないテー

マである。

ノーマン・コーンは、魔女狩りが最高潮に達するまでの全過程の裏にある機動力は、悪魔とその手下の力についての増大し続ける感覚であった、と指摘している。聖界と俗界の権力者達は悪魔の強迫観念から逃れられず、異端者（彼らが魔女と呼んだ人々）を社会から排除することこそが、キリスト者の使命であると考えた。民衆もまた、増加するばかりの社会的不安の原因を自分の周囲にいる誰かの中に求めずにはいられなかった。

筆者は今後、本テーマを掘り下げていくに当たり、このコーンの見解を手がかりに、魔女狩り生成期、中世末期の人々の心性を考察の対象としてゆきたい。当時の人々の心性を知ることが魔女の解明につながり、それはまた、中世キリスト教社会における精神世界の本質を知ることにもつながっていくのではないかと考えられるからである。

## 註

- (1) ヒルデ・シュメルツァー『魔女現象』（進藤美智訳、白水社、1983年）126～139頁参照。
- (2) 一般的には、1275年フランスのトゥールーズにおいて魔女のステレオタイプを用いた裁判によって1人の婦人が処刑され、1335年には同地で最初の、集団としての魔女裁判が行われたとされてきたが、N・コーンがこの説を否定し、実際に魔女裁判が始まったのは15世紀からであることを証明した。これによって、魔女裁判の開始時期がそれまで考えられていたよりもかなり遅かったことが示された。詳しくは、N・コーン『魔女狩りの社会史』（山本通訳、岩波書店、1983年）168～197頁参照。
- (3) 本稿では触れなかったが、魔女が空を飛ぶというイメージは古来からの民間信仰がもとになっている。古代ローマの、昼は女の姿で夜になると翼が生えて乳児をさらって食べる生き物「ストリックス」や、ゲルマン諸部族における、夜空を飛ぶ人食い魔女「ストリガ」といった民間信仰は古くから民衆の間に浸透しており、キリスト教化が進んでも消えることはなかった。教会側はこのような民間信仰を異端的であると考え、15世紀に教会によってこの信仰の「空を飛ぶ」という要素が、魔女のイメージに組み込まれる。空を飛ぶイメージは魔女狩りを推し進める際の重要な要素であった。なぜなら、空を飛ぶことによって魔女が一ヵ所に集まり、大規模なサバトの開催が可能であると考えられたからである。コーン、前掲書、280～310頁。
- (4) 悪魔から超自然的な力を与えられ、それによって人々に危害を与える。例えば、相手を病気にしたり事故に遭わせたり、その命を奪う、あるいは流産・不妊、男性の不能、家畜の死をもたらし、雨を降らせ嵐を起こすなど。コーン、前掲書、133頁参照。
- (5) 「サバト」という言葉は本来ユダヤ教の安息日を意味する。ユダヤ教は伝統的に反キリスト教の精髓とされ、あきらかなユダヤ人排斥から魔女集会の呼名に用いられた。サバトの内容についてはコーンの前掲書134、135頁、上山安敏・牟田和男編著『魔女狩りと悪魔学』（人文書院、1997年）166～175頁参照。
- (6) カトリックの祭礼をパロディ化した儀式。魔女が行う儀礼の多くは、キリスト教の儀礼をパロディ化したものが多い。本稿註(4)で示した箇所、またはジャン＝ミシェル・サルマン『魔女狩り』（池上俊一監修、創元社、1991年）115頁参照。
- (7) シュメルツァー、前掲書、122頁。
- (8) 上山安敏『魔女とキリスト教』（人文書院、1993年）299頁。
- (9) サルマン、前掲書、3頁。
- (10) コーン、前掲書、138頁、157頁。上山・牟田、前掲書、317頁。
- (11) 上山、前掲書、302頁。
- (12) コーン、前掲書、138頁。
- (13) コーン、前掲書、138、139頁。
- (14) コーン、前掲書、139、140頁。
- (15) ジュール・ミシュレ『魔女（上）』（篠田浩一郎訳、岩波書店、1983年）306頁。
- (16) ミシュレ、前掲書、306頁。
- (17) コーン、前掲書、140頁。
- (18) マーガレット・A・マレー『魔女の神』（西村稔訳、人文書院、1995年）25～61頁。
- (19) クルド・バッシュビッツ『魔女と魔女裁判』（川端豊彦、坂井洲二訳、法政大学出版局、1970年）494頁。
- (20) コーン、前掲書、144～146頁。
- (21) 上山、前掲書、305頁。
- (22) コーン、前掲書、146、147、154頁。
- (23) 上山・牟田、前掲書、324頁。
- (24) カルロ・ギンズブルグ『闇の歴史』（竹山博英訳、せりか書房、1992年）508、509頁。

- (25) ギンズブルグ、前掲書、511頁。
- (26) 上山・牟田、前掲書、324、325頁。
- (27) コーン、前掲書、序文ix頁。
- (28) コーン、前掲書、序文ix頁。
- (29) コーン、前掲書、序文x頁。
- (30) コーン、前掲書、序文x、169～197頁。
- (31) 儀礼を行い呪文を唱えることによって悪霊を呼び出し、様々な欲求をかなえようとするもの。これを行なっていたのは男性で一種の知識人である魔術師であり、魔女狩りの時期の「魔女」とは異なっていた。コーン、前掲書、221～242頁、243～279頁参照。
- (32) 教皇ヨハネス22世は、1325年に「魔術を行うものを、異端として訴える」との勅令を出し、儀礼的魔術を厳禁した。コーン、前掲書、234、237、238頁参照。シュメルツァー、前掲書、60頁参照。
- (33) 异端審問は異端者を見つけ出し、撲滅する目的で設置された制度で、12世紀に南フランスで発生したカタリ派がきっかけとなって生み出された。カタリ派撲滅のための討伐軍、アルビジョワ十字軍によって南仏地方の異端者は全滅したが、それでもヨーロッパ全土に異端者は無数にはびこっており、その対策として、1231年の法王グレゴリウス9世の勅令によって異端審問は創設される。14世紀の、魔術を罪とした裁判において問題になっていたのは魔女の魔術ではなく、儀礼的魔術、すなわち魔術師による悪霊の呼び出しであった。森島恒雄、『魔女狩り』(岩波書店、1970年) 27～35頁参照、コーン、前掲書、序文x頁。
- (34) 2世紀において、原始キリスト教徒は非キリスト教徒によって近親相姦や殺人、食人儀式を行っているとして非難されていた。そのような反人間的イメージはそれ以前にギリシャ人によってユダヤ人に向けられていたもので、歴史の中で繰り返されたステレオタイプであった。3世紀に入りキリスト教がヨーロッパの中心的宗教として確立されると、この非難はなくなるが、それはその後の歴史において再び繰り返されていく。立場は入れ替わり、正統のキリスト教徒が他の異端的集団に対して、迫害を正当化させる武器として用いていくのである。コーン、前掲書、6、19、20頁。
- (35) マレフィキウムを行う、空を飛ぶ、セクトを形成しサバトを開催する、悪魔を崇拜しその手下となる、人間を食う、など。以前の魔女像にはなかった宗教的要素が含まれている。コーン、前掲書、132～136頁、311～330頁参照。
- (36) コーン、前掲書、序文xi、xii頁。
- (37) シュメルツァー、前掲書、7～11、255頁、上山・牟田、前掲書、327頁。
- (38) 上山・牟田、前掲書、328頁。
- (39) 上山・牟田、前掲書、334、335頁。
- (40) 上山・牟田、前掲書、316頁。
- (41) 教会の世俗化・腐敗、黒死病（ペスト）の大流行、聖職者の異端への強迫観念、社会の混乱など。
- (42) コーン、前掲書、序文xiii頁、80～99、319～330、348～351頁参照。

## 参考文献

- ノーマン・コーン『魔女狩りの社会史』山本通訳、岩波書店、1983年  
 マーガレット・A・マレー『魔女の神』西村稔訳、人文書院、1995年  
 カルロ・ギンズブルグ『闇の歴史』竹山博英訳、せりか書房、1992年  
 ジュール・ミシュレ『魔女』篠田浩一郎訳、岩波書店、1983年（岩波文庫）  
 ヒルデ・シュメルツァー『魔女現象』進藤美智訳、白水社、1983年  
 ジャン＝ミシェル・サルマン『魔女狩り』池上俊一監修、創元社、1991年（知の再発見16）

クルド・パッシュビッツ『魔女と魔女裁判』川端豊彦・地井洲二訳、法政大学出版局、1970年

上山安敏『魔女とキリスト教』人文書院、1993年

上山安敏／牟田和男編著『魔女狩りと悪魔学』人文書院、1997年

池上俊一『魔女と聖女』講談社、1992年（講談社現代新書）

渡邊昌美『異端審問』講談社、1996年（講談社現代新書）

森島恒雄『魔女狩り』岩波書店、1970年（岩波新書）

（文化論演習Ⅰ論文指導教員 岩倉依子）